



嬉泉の新聞 第87号 2023年（令和5年）3月発行
発行=社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156-0055）TEL 03-3426-2323
<http://www.kisenfukushi.com> E-mail: kisen@kisenfukushi.com

対談：「受容的交流療法が表すもの」を受けて

渡辺慶一郎氏（東京大学教授）× 石井 啓（本法人理事長）

今号は、第86号にて巻頭言「受容的交流療法が表すもの」をご寄稿いただきました、東京大学相談支援研究開発センター 教授（医学博士）渡辺慶一郎先生と、社会福祉法人嬉泉 石井啓理事長との、2022年10月に子どもの生活研究所にて行われた対談の様をお届けいたします。

1時間半ほどの対談は嬉泉の今後に向けて、とても貴重なお話となり、今号のみでは掲載しきれない量となりました。そこで、今号では前編をお届けし、次号にて後編を掲載いたします。

また、いち早く後編がお読みになりたい方は、5ページに掲載したQRコードより、全編を掲載した特設ウェブサイトへアクセスいただけます。ぜひ、ご覧ください。



嬉泉の新聞 第87・88号スペシャルコンテンツ

精神科医（東京大学教授）

社会福祉法人嬉泉 理事長

渡辺 慶一郎 × 石井 啓

対談：受容的交流

渡辺慶一郎先生×石井啓理事長
対談(前編)

石井・渡辺慶一郎先生にはいつも色々

な嬉泉の事業にご協力いただいていると同時に、以前は評議員を務めていただきました。現在はその評議員を選任する選任委員をお願いしています。そのような関わりの中でいつも感じるのは、本当に私たちの実践に対する温かい眼差しと言いますか、嬉泉新聞第86号に寄稿してくださった原稿を読ませていただいて、本当に力づけられる言葉をいただいていると感じています。現場の職員たちにとっても、私にとっても勇気づけられることなので、今日はそのことをもう少し掘り下げて、私たちが行っている受容的交流というものについて、好意的に見てくださっている渡辺先生から、ご理解いただいている内容を伺いたいと思います、このような対談という形式で機会を作らせていただきました。

原稿の中でも書いてらっしゃいますが、自閉症のような、コミュニケーション困難な方の成長可能性というものを信じているというところを取り上げてくださっているわけなんです

が、どういったところで受容的交流の良さ、みたいなものを感じていらっしゃるかというところを、まずお聞かせいただけますでしょうか？

渡辺…ありがとうございます。僕は石井哲夫先生と直接お会いしたことは実はそんなにないんです。だから逆に印象的だったのかもしれないのですが、あるシンポジウムで、何人かの研究者の方が話していて、石井哲夫先生が司会をやられていたんです。そのときの聴衆のひとりが野次といいますが、大きな声でワーツと話し始めたんです。それで皆「困った、どうしよう」という感じで顔を見合わせるような状況だったのですが、石井先生は「どうしたんだい？」みたいな感じで、落ち着いて対応されていたのです。そのおかげで、険悪な雰囲気にならずに、なんともうまく収まったのです。むしろその方も少し主張出来てトーンが柔らかくなったのです。もし自分が司会で、そのような批判的な発言を受けたら、とても話を聞いたりとか、良いメッセージをその場で発するということのようなことはできなかったなと思います。それで、「現場力というか臨床の力が本当に凄いのだな」と改めて

思っただけです。

また、精神科専門誌に投稿された論文で、成人発達障害の方のケースで石井先生がサイコドラマを行ったエピソードに触れたことがあります。非常にグッとくる内容で、硬い自閉スペクトラム症の方ではあるけれど、お互いを思いやる事が出来て相互の会話が成立したというものでした。70〜80年代に症例報告という形で残っているものも拝読すると、その方々の社会性やコミュニケーション能力の成長可能性というか、実際に成長・成熟している様子が読み取れるのです。

日々、発達障害の子どもや成人の療育支援を行っている方たちにとって、そのような成長を感じることは日常的なことなのかもしれないのですが、私たち精神科医にとっては、診察室で短時間しか会わないですから「今、まさに成長したな」という感じはあまり無いのです。それゆえに私が「受容的交流ってすごいな」と憧れのような状態になっているのかもしれない。ただ、それにしても、困難を抱える領域の成長が実際に起こっている、そういうことを仕掛ける人がいるんだと思ったら、自分にとっても当事者とかかわりにおいて、まだ出来る

ことややるべきことがあるなど感じるのです。

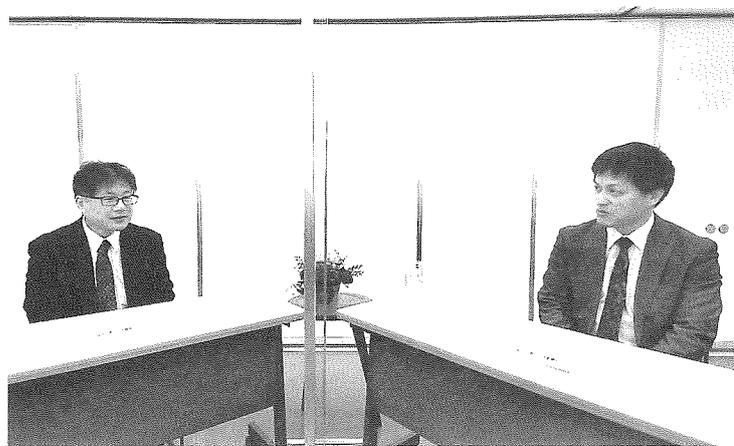
それで興味を持って調べていく中で、インターネットで世界自閉症啓発デーのシンポジウムで石井哲夫先生が話している動画がありました。その中で「適切に受けとめて理解し、その上で適切にかかわる」ということを言われておりました。ああ、これが受容的交流のことなのかなと感じたのです。「理解」というのは知的な理解であって、一般的に言われている特性をこの人も持っているのだという理解であり、「受け止め」というのは多分情緒的なもので「大変だったんだね、苦しかったんだね」という共感かと考えました。こうした理解と共感を前提として、適切に働きかけることが大切なのだと感じています。現場の人にとっては多分、珍しくもない、いわば普通のことなのかもしれないですが、だからこそ大事なのだとも言えるかと思えます。

受容的交流療法の流れの一方で、SST(ソーシャルスキルトレーニング)や認知行動療法、応用行動分析などの行動面から変えてゆく手法が開発されてきました。行動は取り扱いきい易いので短期的に変えることもで

きる。例えば喧嘩をしてしまう子に、それをしないようにする行動上の介入テクニクは色々あるでしょう。でも、それ（喧嘩しないこと）ができるようになってよかつたね、じゃあ次は何しましょうか？（今度は暴言を止めさせましょう等）というパッチワークのような繰り返しでいいのかなと思うのです。多分、人と関わる上での基本的な領域が、成長・成熟するのが本質であって、そこを取り扱わないことには、逆に行動面の介入テクニクも成り立たないと思うんです。しかし、これこそが大事なんだと真正面から言うのは勇気がいることです。簡単に変化する領域でもないです。（受容的交流療法では、これこそが大切なのだと主張していると思いますので）、そうしたところに私は惚れ込んでいるのです。

自分の子どもの幼稚園を探すときに「英会話やっています」「スイミングやっています」とか、そういうおまけみたいなものを大きく謳っている幼稚園がいくつもあつたのですが、もつと子どもと向き合うこと、子どもだけでなく親も成長しなければならぬこと、手間はかかるし面倒くさいところはあるけれど、それが大事なのだと

主張しているところを探しました。私の地元がここ（子どもの生活研究所）からは遠いので、大切なことに向き合う（受容的交流療法的な）ところを探して入園させました。ちよつと話がそ



れてしまったのですが、そんな風に惚れ込んでいるということなのです。

石井：ありがとうございます。今のお話の中にありました「適切に理解して、適切に受け止め、適切にかかわる」

というのは、確かに受容的交流の、ある意味神髄と言えらると思います。言葉にするると本当に平易で、当たり前前といえば当たり前聞こえるような言葉なんですけど。やはり自閉症の方を我々支援者が理解するのが難しかったり、当事者ご本人も人とかかわるのが苦手だったり、そういう方に対して、きちんとそれを行うというのは本当に大変だということを渡辺先生はよくお分かりになっているからこそ、おっしゃっていただいているのだと思います。

我々が自分たちの実践を語ろうとするときに、まさにそのことがあまりにも当たり前聞こえるがゆえに、伝えるのが難しいと言いますか。そこには石井哲夫もかなり力を注いでいました。理解する、受け止める、働きかけかわる」というところを言葉にして説明するというより、自ら実践してみせていたのだと思います。

現場の中でも実際に、職員同士の関係の中で、先輩とか上位者がやっていふことを後輩職員が見て、それを自分なりに真似るところから始めたり、あるいは違うアプローチをしたりと、試行錯誤していくものです。それが本当に利用者に届いたのかどう

か、ということを確認するのも、利用者本人の変化はもちろん、先輩や上位者との話の中で、「理解するってこういうことか」「受け止めるってこういうことか」と、より深いところできんでいくことの積み重ねで、ようやく職員自身の手応えになってくるものなのだと思うのです。

ただ、それを新人職員に伝えていくのは、本当に時間も手間もかかりますし、実際にそれをものにしていくかは、皆が皆というわけにはいかないところもあります。

先生のお話の中にもありましたが、ASD（自閉スペクトラム症）支援というか、強度行動障害支援者養成研修を行う中で、応用行動分析とか構造化といったものが取り入れられ、それらがスタンダードな手法とされてきています。決してそれを否定するものではないのですが、それだけでは足りないんじゃないか、むしろ、もつと土台になるものが必要なんじゃないか、ということをおうとするとき、なかなか適切な言葉にできないのが非常にもどかしいと言いますか。そういった言葉で伝えていくためにどうすればよいか、何か先生にお知恵を貸していただければと思うのですが。

渡辺：例えば、支援者への助言として、お互いの信頼関係が大切だとか、その当事者のことを理解して、受け止めること、とか言う。「もう信頼関係はできてます」というように返されてしまうことが多いのです。しかし、石井理事長がおっしゃった通り「あ、そうだったんだ」と感じられる領域まで踏み込んだりとか、利用者とかかわりの中で「あ、そういうことだったのか」と理解が深まったりすることがあると思うのです。それまで「できていた」と思っている、まだまだ不十分だった（まだ出来ることがあるのだ）ということが、そこで初めて分かる。それを言葉にして伝えるのは、なかなか難しいことだと思います。

受容的交流では、いわゆるマニュアルのようなものは作ってないですね。例えばチェック項目があつて、これができたら上級者とか、今風のプロトコルになっていないというのはつまり、言葉にすると何かが損なわれるから、ということもあるのかなとも思います。

言葉にして物事を区切って「ここからここまで」と表現してしまえば初心者にもわかりやすいのでしょうか、それでは味気ないもの（本質が抜

け落ちたもの）になってしまう。だから言葉のマニュアルにはなっていないし、むしろ良くなって良かったのではないかと思うところもあるのです。実践の中で人から人へ直接伝えていくしかないのではないかと、私は今のところ思っています。

しかし一方で、言葉にして伝えていく努力は必要で、（受容的交流をベースとした）こういった切り口もあります、こういう解釈もあります、ということ発信していくのだと思いますが、それは「人間とはなんぞや」といいたいな問いと同じで、100%のゴールはないのかもしれない。

嬉泉が大事にしていることが、必ずしも家族や関係者が求めているものと一致するとは限らない場合もあるのではないのでしょうか。例えば発達障害のお子さんのケースで、言葉ができ、着席していられる、小学校も普通級に行けるようにして欲しい、とにかく行儀よくできるようにして欲しいといった要望は（それ自体は自然な求めだとは思いますが）、受容的交流療法が目指すものとはちよつとズレてしまう。だから、そういったニーズに対して、自分たちがどういう人間形成を目指しているのか、ご家族や関係

者に理解していただけるようすり合わせていくのは大事だと思います。

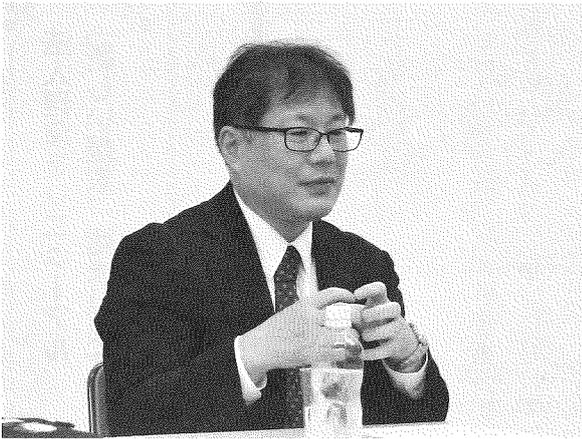
そして、受容的交流がひとつのキーワードになって、それが軸としてあつて、支援者が「これは大事だよ」ということを認識すると、支援者自身が普段の生活もちよつと見直すというか、仕事の場だけではなく、自分の在り方というか。本当に自分が主体的か、ほかの人を理解して受け止めているか、そういうことを振り返らざるを得なくなると思います。

石井哲夫先生は職員の研修にも力を入れていらつしやつたと思うのですが、サイコドラマは職員向けにもやっておられましたよね。支援者が主体的でない、利用者も主体的にできないもの、利用者も主体的にできないものではなくて、なかなか今風にはいかず、勤務時間外に集まつて話し合うとか、そういうことが必要だったのでないかな。何というか、思想というところまで踏み込むと批判も出てくるのかもしれないのですが、人と関わることは、やはりこちらも片手間ではできないというか。しかも、小さい子どもとか弱い立場の人が相手だから、余計にこちらが力を入れなければいけないことなので、や

はり簡単には到達できない領域というのが真実かと思えます。ですから受容的交流を語るのもやはり簡単にはいかないのではないかと。勤務時間で区切れないのは、今の人には合わないのかもしれないのですが。

石井：私もお話を伺っていく中で、自分もそういう風に思っているところがあります。

私自身はなかなか石井哲夫のようにはできませんが、ただ思い返してみると、石井哲夫のやっていたことは、もちろん一義的に利用者への支援なのですが、そこにやはり自分自身の生き方みたいなものが現れていたというか。もう仕事だ、プライベートだ、というのを超えて、自分自身の暮らしの中に自閉症の人たちとの付き合いがある、みたいなイメージでした。そこにはもちろん、職員の人たちも入っていて。だから、先生がおっしゃるように仕事だ、プライベートだ、という区切りというより、本当に「人としてこう付き合っていく」という風で。仕事が終わったらオフに切り替わって、ということでは全くなって、生き方に入り込んでいくというか。石井哲夫は、そういうことでしかできな



かったし、そういうことをむしろやりたかったのだろうなと、今更ながら思いますね。

私自身がそこまでできるか、と言うと、なかなか難しいところもあるんですが、やはりオンオフでスイッチが切り替わるようにという風には、自分もなかなかできないなあ。若いころは割と仕事は仕事、自分自身の暮らしは暮らし、でやれるといいなと思っていた時期もあるんですけど。でも結局、仕事から帰っても仕事のこととは考えるし、仕事で受けた色々な影響っていうのは残っているし。

先生もおっしゃっていましたが、自

分自身の生き方？という大げさですが、身の処し方みたいなところは、本当に問われているな。

自分が本当に思っているわけではないことを相手に求めることは不自然なこと、真実味や説得力がないから伝わらないし、当然相手も変わっていかない。だから、そこで自分自身を変えていくことが求められるというか、必要なだろうなと思います。

でも、受容的交流を実践していくためにはそういうことが必要だつて、表立って言ったら、多分相当数の職員は「そんなできないよ」ってなるだろう。結果的にはそれに近いような生き方になっている人は少なからずいると思うのですが、それを人に言われて、その方向に進んでいこうとする人はなかなかいないのではないかと。実際に、利用者と向き合いながら、自然に自分が影響されるというか、必要に駆られて変わっていかざるを得ない、みたいなことを経験していくと、自然と変わっていくというか、掴んでいくものなのだと思います。

渡辺…いや本当に、その通りだと思います。私も自分の職場では休みの日に仕事をする(させる)のはいけない

ことなんで、言えないんですけど。でも、石井理事長もどこかで書かれていることで、仕事だけ切り出して人を雇うのではなく、育てていくこと込みで来てもらうんだ、というふうに説明されていたと思います。仕事だけ切り出してやってもらって完結する領域もあるとは思いますが、育つとか、成長するというと、仕事以外の、業務の成績とかではカウントしようがない領域だと思うのです。

例えば、医療の領域だと、国の方針で診療報酬がこのように変わったから、病院の方針も報酬が上がった領域に力を入れて、儲からない仕事は切ります、とか。そういうやり方もあると思うのですが、それだけでなく、人格という言いすぎなんですけど、人としての矜持というか、トップの方がそれを大事だと思つていて、ということが大事だと思います。

石井…ありがとうございます。そうですね、突き詰めていくと、なんか今の世の流れとはどうしても合わないというか、ある意味反するところが出てきてしまうところがどうしてあつて、それを大っぴらに公言するのは憚られるところもあつてモヤモヤす

るのですが。

改めて先生とお話して感じて感じたのは、変えてゆくといいっても変わるものでもないというか、さっきのマニユアルの話もそうですが、言い切つてしまつてそこで変質してしまうというか、本質を外してしまつてみたいところがあつたり、あるいはその、やり方というか、大事なところを変えて、今風の時流に合うような形にしてしまつて失われるものっていうのが、大きいんだろうなと思います。ある意味これで良かったんだ、ということをおっしゃっていただけなのは嬉しい反面、「さて、どうしよう」というところも残つてしまうのですが。

(次号に続く)

左記のQRコードより、本対談を掲載した特設ウェブサイトにアクセスすることが出来ます。
次号掲載予定の後編も、今すぐに読めますので、ぜひご覧ください。



法人理念をリニューアル
「新しい嬉泉、始まります。」

二〇一三年二月十八日に、二〇一二年度法人全体職員研修が行われ、その中で「ここから未来プロジェクト」の成果発表として新しい法人理念のお披露目が行われました。

「ここから未来プロジェクト」は本紙第八五号にて石井啓理事長が『嬉泉の「ここから未来」にむけて』という記事で触れたプロジェクトです。石井哲夫前常務理事が体現していた受容的交流理論をもとに新たな拠り所となる言葉を紡ぎだし、職員共通の価値の再構築を目指しました。以下がその新たな理念を示す言葉となります。

認め合いながら自分らしく生きること
を支えあう独自の援助活動を社会に広
げていく

(3) バリュエー

（ミッションを実現に導く独自価値）

（その活動の中心にあるのは）

『受容的交流理論』の考え方

・人を人として尊重し、受け容れる、
受け容れられることを通して生まれる
信頼関係・かわりを重視することで人
の中で生きていく力を育てあう理論

(4) ビジョン（実現したい未来）

（その実践の先にあるのは）

私たちは、かわる一人ひとりが安心
でき、主体性を発揮し、自己実現を目
指す共生社会を実現する。

(5) スピリット（大切にすべき精神）

・ 私たちは、先入観にとらわれず、一
人ひとりを見つめぬぎます

・ 私たちは、ここを思いを大切にし、
育つ力を信じぬぎます

・ 私たちは、とことん質を追求し、仲
間とともに高めあいます

・ 私たちは、互いの信頼関係を重視し、
誠実に向き合います

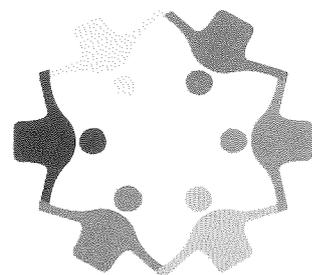
・ 私たちは、支援の中で、自分及び利
用者が社会的存在であることを常に
意識します。

どんな障害を抱えている人も、
その人ひとりひとりを静かに見つめれば、
自ら成長しようという意思と
育とうとする力が見えてくる。

福祉とは、一方的に与えるものでも、
求められるままに委ねるものでもない。
人を人として尊重し
受け容れあうことで生まれる信頼関係に基づく福祉へ。

懸命に生きる。
その生き方を支える。

社会福祉法人嬉泉、
すべての人が
等しく生きやすい共生社会に向けて。



KISEN

懸命に生きる。
その生き方を支える。